



YES 通信



〒819-1116 糸島市前原中央2-2-22波多江ビル2F 電話 321-4119 2022年3月号

子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか

私が勉強法や子育て法に関して尊敬している方に親野智可等先生という方がいらっしゃいます。その方の記事にとても参考になるものが書いてありまして。その言葉とは、「子どもができないことはやめてあげなさい。」というのです。

「小さいうちから出来るようにしておかないと将来困る」とか「やめてあげると自立できない」との思い込みがあるのも事実なので、なかなか理解できない方もいらっしゃるかもしれませんが理由を聞いて納得してしまいました。勉強が苦手だったり、あまり自分から行動できなかったりする生徒には、親の関わりによって自信を失っているケースが多々ありますので是非読んでください。以下要約

① 「子どもが自信を失うのはなぜか」

細かいしつけにこだわって叱ってはかえりなくあります。子どもができてくれないでかえりなく、大人にならなければならないから大丈夫です。親たちはみんな、「大人になってからではおられない。子どもがうちはならぬ」と思い込んでいますが、実はこれはまったく根拠のない迷信です。実に罪深い迷信です。この迷信のおかげで、古く東西とだけだけの親の子どもが苦しめられてきたかわかりませんが、

人になってからの方がおもしろい」とというのが現実です。もちろん、大人でも簡単なことではありませんが、子どもがよりおもしろい可能性が高いのです。

「なおす」というのは、生まれ持った自分の性格をかえらうことなのです。つまり、自己改造です。これには、本心に直したい。絶対直さなければ」という強烈な内面的モチベーションが必要です。そのモチベーションはどんな時に持つべきなのでしょうか。

1つには、何か大きな失敗をして「このままでは自分の人生まずい！」と思ったときです。もう1つは、自分の人生でやりたいことが見つかって真剣に取り組み始めたときです。それを実現するには自己改造が必要になるのです。

③ 子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか

いすれにしても、自分の人生、生き方、将来などを真剣に考えるようになってからの話です。つまり、大人になってからです。早くても思春期以降です。子どもの時には、「こういうモチベーションを持つことができません。だから、直らないのです。だから、子どもができません。だから、直らないのです。」だから、子どもができません。だから、直らないのです。

やめてあげたのと同じく、子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか。子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか。子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか。

今、児童心理学者たちは次のように言っています。できないことを叱ると、子どもは自信がなくなってしまう可能性があります。それよりも、上手にやめてあげたほうが、子どもが自信を持って生きていくことができます。上手にやめてあげるといえるのは、子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか。

もちろん、子どもがやる気があって、時間的な余裕もあるときは待ってあげてください。そういう時もやめてしまっているのは、もちろん自立の妨げになります。でも、子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか。子どもが自信を持って生きていくにはどうすればいいか。

以上要約終了

いかがだったでしょうか。出来ることは大切なことですが、自信が失ったり、出来ない人を責めたり、する人だけにはなりたいと思いません。自信をもって、出来ないと認めて協力し合える人に育って欲しいと思います。そのためにもご家庭でも自信を持たせたいと、協力し合える関係性を築いていくことが意識を向けて欲しいと思います。

やる気相談室

医療

医療制度は「そのまま」で良いのでしょうか？

西洋医学の流派には、心理療法（サイコセラピー）、

整骨療法（オステオパシー）、自然療法（ナチュロ

パシー）、同種療法（ホメオパシー）、逆療法（アロ

パシー）の5種類があったそうです。今日は、その一

つであるアロパシー（A

lopathy）だけが「西洋医学」となり、これ以外の流派は「非合法」となっています。

当初、アロパシーは「逆療法」と、まともには訳されていませんが、現在は「対症療法」と訳されるようになったそうです。

つまり日本では、合法的な医学と言え「対症療法」（アロパシー）であり、これ以外のものは原則として「非合法」であり、最近では「代替医療」と言われています。

アロパシーとは「病気の症状とは逆のことをする」という意味です。つまり、血圧

が上がれば、下げる方法を考える。熱が上がれば、下げる方法を考える。咳が出れば、止める方法を考える。というものです。

何故、血圧が上がると、熱が上がると、咳が出るのが全く、考えられていません。

こんな事に不信感をいただき統合医療の道に進む医師がいらっしやいます。以前書籍

紹介のコーナーで紹介した糖質制限で有名な産婦人科医の宗田先生もその一人で、他

にも多くの医師が声をあげられています。

簡単な例を風邪で見えていきましょう。風邪の症状は、熱が上がります。これは体温を上げて、悪い細菌を殺菌しようとしています。咳・痰が出ます。これは、体内の悪いものを排出しようとしています。つまり、

風邪をひきますと、自然治癒力が作動して、治癒するための活動（症状）が自然に発生してきます。ですから、このまま、殺菌活動・排出活動を継続していけば、風邪は根治されます。そのためには、自然治癒力を高めるためには良いのです。

あらゆる病気の症状は、この自然治癒力

の表れです。しかし、アロパシーは、この自然治癒力に逆らい、熱を「解熱剤」で下げ、咳を「咳止め剤」で止めてしまっています。そうすると、一時的に症状が和らげられるので、患者は「治癒した」と錯覚します。

実際のところ、細菌は体内に残り、異物・毒物は排出されずに残留していますので、

いすれ、再発したり、他の病気にかかったりすることになります。病院で治療するのは、仕事の都合でどうしても熱を下げたい

時など最低限の利用にすべきなのです。日本の医療費は年々増加の一途をたどっていますが、病人の数は増え続け、このままでは国の財政も破綻しそうです。外国では代替医療を認め病気を未然に防ぐ方向にかじを切っている国が増えていますが、日本ではアロパシーに頼っているのが現状です。私はなるべく病院に行かない主義で、

もっと予防にお金を使いたいと考えていますが、みなさんはどう思いますか？

コロナが収まったらまた健康セミナーを実施したいと考えています。

齋藤孝著

イッキによめる！夏目漱石×太宰治

書籍紹介

この本は、前回紹介したこの本の著者である齋藤氏の著書「語彙力こそが教養である」の中で漱石の本を読むことが語彙力アップへの一番の近道と書いてあったので、漱石の子供向けの本があればと思い探したら目についた本です。この本の特徴は夏目漱石と太宰治の9作品を読みやすくして、タイトルにもあるように小学生でもイッキに読めるように工夫されています。漱石が出てくるまでは日本語は話すものと書くものでは言葉が違っていたのです。それを漱石が出てきたことで「言文一致」という方法で、話すように書くことになったのだそうです。それだけに漱石の文章は音読に最も適した本でもあるのです。齋藤先生も語彙力アップには音読が最適だとおっしゃっています。音読をしようと考えているご家庭には最適の本です。改めて読んでみると確かにリズムが良いことに驚かされます。また、太宰の文には勢いがあり今ここで話されているかのように日本語が流れてきます。文学が好きではなかった私は9作品のうちの4作品しか読んでいなかったの、文学にあまり触れてこなかった大人の学び直しにも最適な本だと思います。齋藤先生が書きで「文学」とは「人の心を言葉で表現したもの」と書かれていました。読んでみて、自分の苦手な分野は人の気持ちや感情に寄り添えないことだと反省して、もっと文学にも触れていきたいと感じた次第です。

